II
学図
小国205

文部省検定済教科書

財団法人 教育図書研究会編修

教育学部
資料室

二年生の こくご 中

小KC
G16

学校図書株式会社発行

50494

教科書文庫

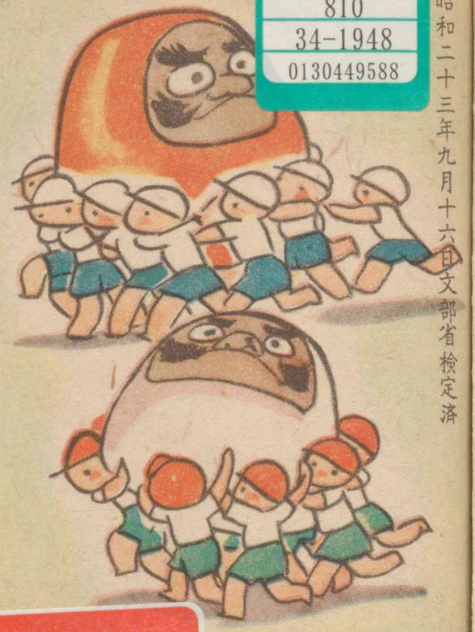
5
810
34-1948
01304
49588

寄贈

教科書文庫
5
810
34-1948
0130449588

二年生の こくご

昭和二十三年九月十六日文部省検定済



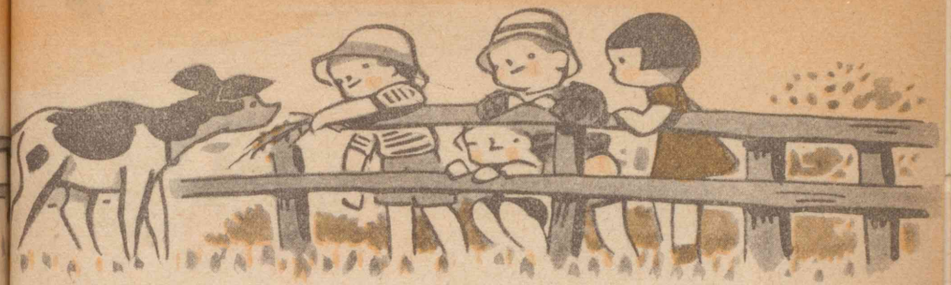
広島大学図書
0130449588

中学校図書株式会社

廣島大學
教育學部圖書

中央図書館

広島大学図書
0130449588



もくろく

一　てんらん会　四
二　おるすです　十四
三　はとばの　ねずみ　十六
四　ふみきり　二十
五　お月さま　二十六
六　のりものごっこ　二十九
七　二宮金次郎　五十二
八　しばふの　上　六十一
九　おちば　六十四
十　冬が　くる　七十五
十一　かんばん　七十七
十二　氷すべり　八十二
十三　もちつき　八十四

一　てんらん会

一

二三日前から、ずがの
きょうしつに、

という はり紙が して ありました。ぼくは、きょ年の てんらん会の ことを 思い出して、早く みたくなりました。

二

きょうから、てんらん会が はじまりました。ずがきょうしつの 入口には、きれいな かざりつけが でき、学校の あちら こちらには、てんらん会の ポスターが はられて います。

へやの 入口の はり紙も、とりかえられました。それを よむと、ぼくらの 組は、金よう日の 三じかんめ

に、みる　ことに　なっています。

かねが　なると、みんな　ろうかに　ならんで、先生を
おまちしました。先生は、すぐ　いらっしゃいました。て
んらん会を　みる　時の　ちゅういを、みんなが　はっぴ
ょうしました。

「よく　わかって　いますね。それを　まもって　みて
きましょう。」

と、先生が　おっしゃいました。

三

へやに　はいって、いちばん　さき
に　目に　ついたのは、一メートルも
ありそうな、ヨットの　もけいでした。
白と　赤の　ペンキで　すっきりと
ぬりわけて　あります。白い　大きい
ほは　風を　うけて　よく　走りそう
です。

山田くんの　にいさんは、ちょうの
ひょうほんを　出して　いました。赤・
青・むらさき・黒・き色など、うつく

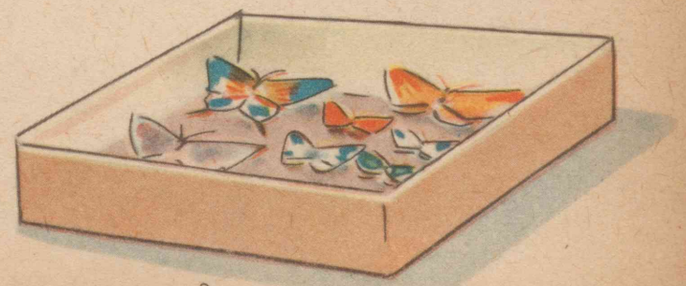
しいはねを、ぴんと　ひろげた　ちょうが、ガラスばこの　中に、きちんと　ならべて　あります。

先生が、

「山田くんの　にいさんは、三年生の　ころから、これを　やって　いるが、ずいぶん　うまく　なったね。」

と　おっしゃると、山田くんは、

「いろいろな　虫や　ちょうが、もう　五百ぴき　ぐらい　あつまったと　いって　いました。この　夏やすみには



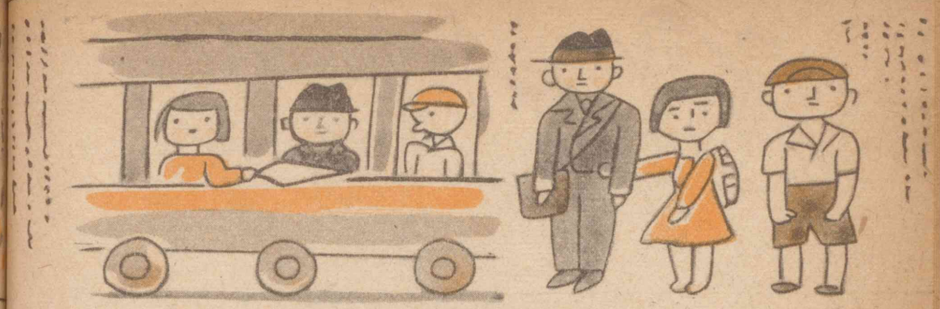
ずいぶん　とおい　ところまで、とりに　いきました。うちでは、ちょうちょの　先生と　いわれて　います。」

と　いいました。

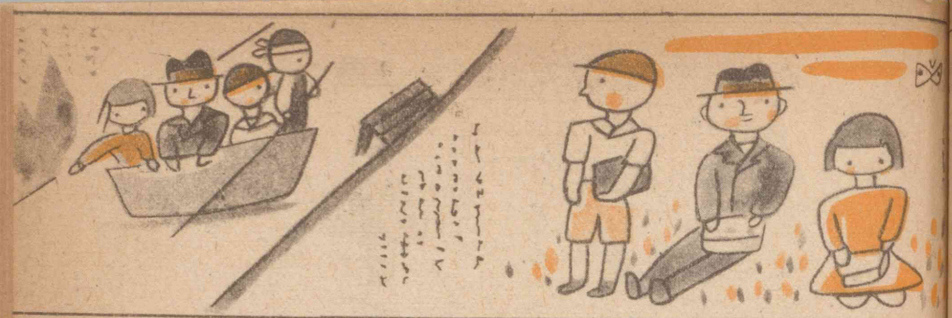
えの　すきな　林くんと　三木くんが、なにか　話しながら、一まいずつ　ていねいに　みて　います。

きかいずきの　秋山くんは、もけいの　でんしゃを　ねっしんに　みて　います。

女の　人は、先生を　とりまいて、なにか　お話を　きいて　います。



だれかの　おかあさんが　二人　はいって
こられました。先生と　ごあいさつを　して
います。
「二年生」と　いう　ふだの　立てて　ある
ところには、あつ紙で　作った　大野くん
の　小鳥の　おうち、小川さんの　え日記、
南さんの　はこにわ、ぼくの　作文ちょうな
どが　ならべて　あります。
かべに　はって　ある　ものの　中では、
五年生の　春山さんが　書いた「たびの　え



まき」が、目を　ひきました。がよう紙を　つ
ぎたして　作った　この　えまきは、かべ
の　はしから　はしに　とどくほど　長いも
ので、三四十まいの　えと　文で　できて
います。
「よく　書いて　あるね」。
先生も、かんしんして　みて　いらっしゃ
いました。
ひとまわり　みた　時、先生が、
「おもしろい　ものを　みせて　あげよう。

こちらへ　いらっしゃい。」
と　おっしゃいました。なんだろうと　思って　あつまると、先生は、ちんれつして　あった　ゆびにんぎょうを、りょう手に　はめて、とても　こっけいな　にんぎょうしばいを　して　みんなをわらわせました。
「さあ、かねが　なりました。もっと　よく　みたい　人は、あ

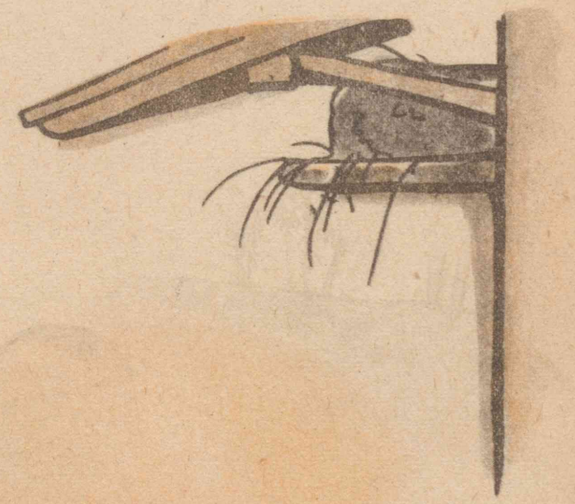
したべんきょうが　すんでから、また　いらっしゃい。」
と　おっしゃいました。
ぼくは、もう　いちど　みたいと　思いました。そうして、三年生の　夏やすみには、なにか　すばらしい　ものを、作りたいと　思いました。
へやを　出る　時　さっきの　おかあさんが、ぼくの作文ちょうを　みて　いらっしゃいました。ちょっと　はずかしく　思いました。

二　おるすです

どちらへ　つばめは
いきました。

お国へ　かえって
いきました。

つばめの　お国は
どちらです。



お国は　南の
とおくです。

海こえ、海こえ、
海こえて、

とおくの、とおくの
お国です。

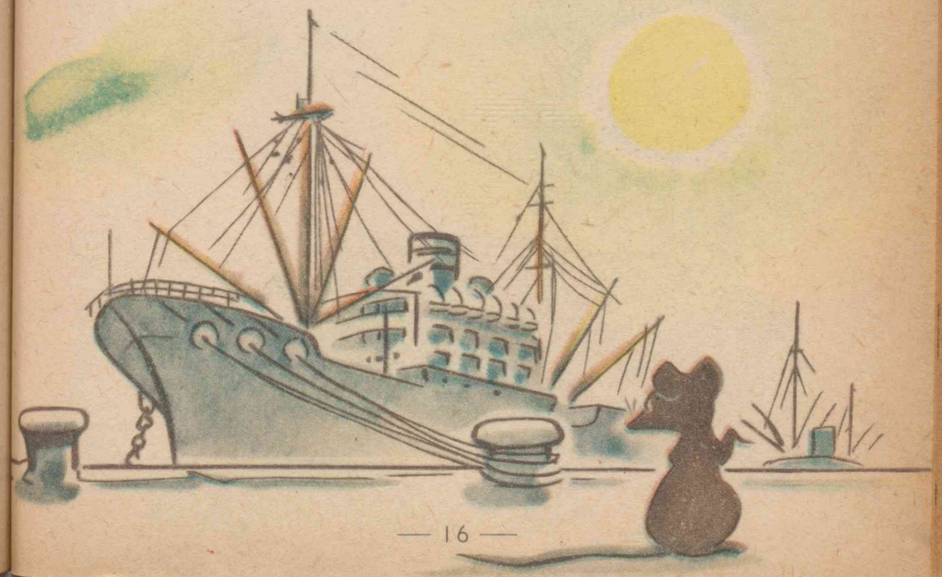
三　はとばの　ねずみ

月夜の　ばんです。

はとばに　大きな　かもつせんが　よこづけに　なって　います。ふねと　がんぺきの　あいだに、ふとい　ロープが　たれさがって　います。

ロープが　すこし　ゆれたかと　思われました。

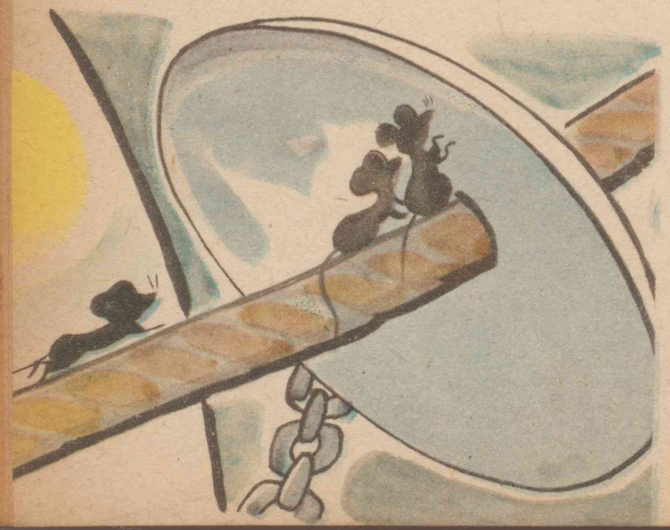
ねずみが、はいのぼって　いくのです。



ねずみは、かもつせんの　中に　はいりこんで、つみこまれた　米や　麦こを、たべあらす　つもりでしょうか。

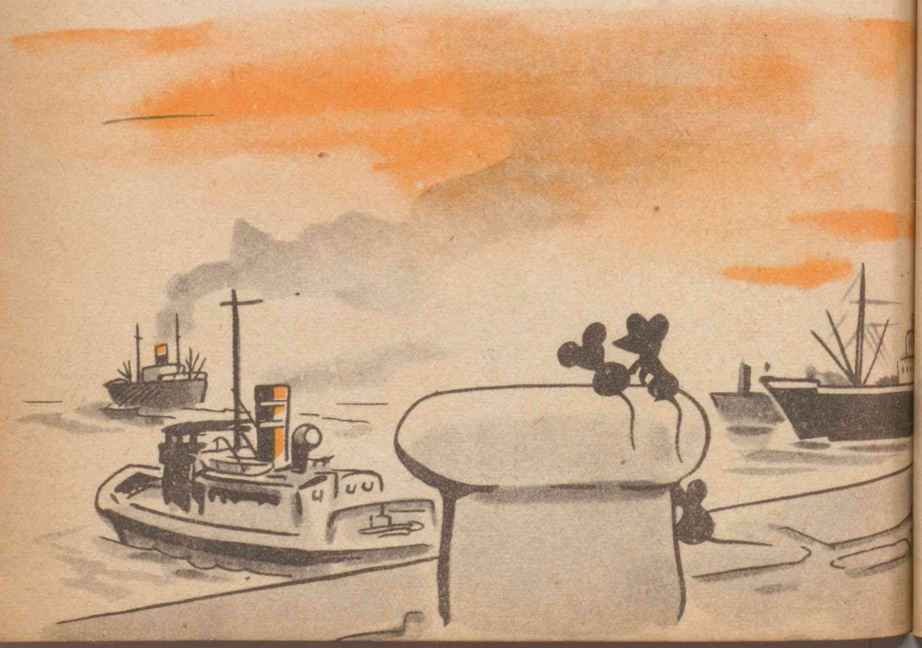
のぼって　いって、ねずみは　とちゅうで　こまりました。さきへ　いこうにも　いかれない、ねずみよけが　あったのです。

ブリキで　作った　ねずみよけが、ロープにとりつけて　あったのです。



「だめだよ、だめだ。」
ねずみは、ロープを　おりて　きました。
ぼくなら　だいじょうぶと、もう　一ぴきの　ねずみが
ちょろ　ちょろ　のぼって　いきました。
「だめ　だめ、だめだ。」
そうして、ねずみは　つぎから　つぎへ　かわるがわる
に　のぼっては　おり、のぼっては　おりました。
ペストや　いろんな　びょうきの　ばいきんを、もつと
いう　ねずみたち。

みなとの　空は　あけて、
朝に　なりました。
米や　麦こを　つんだ
ふねは、一ぴきの　ねずみ
も　いれないで、いかりを
あげて　しゅっぱんしまし
た。



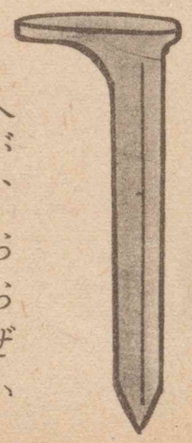
四　ふみきり

いきおい　よく　汽車が　とおり
すぎた　あとは、また　しずかに
なりました。
ばん人の　いない、人も　たまに
しか　とおらない、小さな　さびし
い　ふみきりです。
『きしゃに　ちゅうい。』

と　書いて　ある　ペンキぬりの　白い　はしらが、そば
に　立って　いるだけです。
せんろは、ぎん色に　光って、ずっと　とおくまで　つ
づいて　います。
その　せんろの　そばの　道を、学校の　せいとのよう
な　ぼうしを　かぶって、ねじまわしと　ハンマーを　か
ついだ　おじさんが、あるいて　いきました。
てつどうこうふの　おじさんです。
おじさんは、せんろの　ねじが　ゆるんでは　いないか、

まくら木の　犬くぎが　とれては　いないかと、汽車の
とおった　あとを　しらべて　あるいて　います。
まいにち、朝　早くから　夕方まで、てくてく　あるく
のです。
雨が　ふっても、風が　ふいて
も、せんろを　しらべて　あるく
のです。
そして、せんろの　ねじが　ゆ
るんで　いたり　まくら木の　犬
くぎが　とれて　いれば、すぐに

なおして　おきます。
汽車に　のって　いく　人た
ちが、まどに　もたれて、いね
むりを　して　いる　時でも、
汽車の　走って　いる　せんろ
の　どこかで、おじさんは、は
たらいて　いるのです。
おじさんのような　せんろこうふの　人が、おおぜい
いて、日本じゅうの　てつどうを、まい日　なおして　い
るのです。



おじさんは、いま　ふみきりの　そばの　草むらで、おべんとうを　たべて　います。ゆっくりと、おいしそうにたべて　います。

日に　やけた　ほおに、ごはんを　ほおばって、まっ白い　じゃうぶな　はで、カリリ　コリリと　たくあんをかんで　います。

いきおい　よく　汽車が　走って　きました。

かもつ列車です。

せきたんや、ざいもくや、お米

や、いろいろな　ものを、たくさん　つんで　走って　きました。

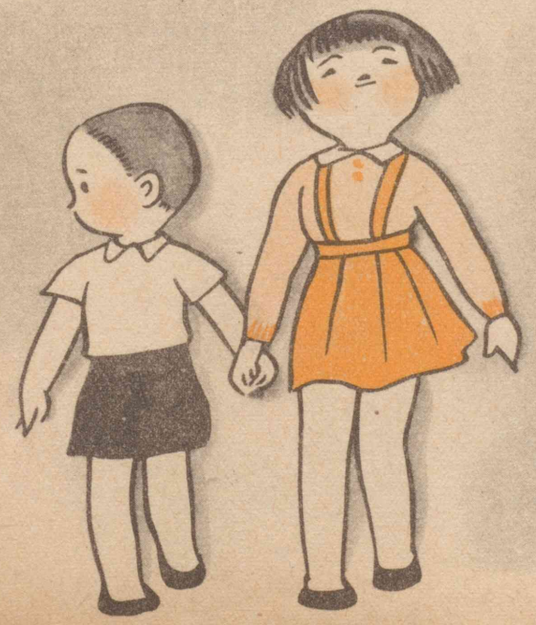
地ひびきを　たて、白い　ゆげを　ふきちらして、とおりすぎました。

そして、とおく　小さく、やがて　みえなく　なって、ふみきりは　また　しずかに　なりました。

五　お月さま

ひとまわり、
ふたまわり、
さんぽを　して　きたが、
まだ　出ない
お月さま。

—こんばんは、
—こんばんは、



くらい　夜道を　いく　ちょうちんが、
とおりすがりに
声　かけた。

星は　いくつも
出て　いたが、
まだまだ　出ない
お月さま。

みんな　ねむって

夜ふけに　なって、
やっと
出て　きた
お月さま。

まどから
おへやを
のぞきながら、
みんなの　ねがおを
てらしだす。

六　のりものごっこ

――まくが　あくと、もみじの　山で、三びきの　さる が、一のさるを　かこんで　います。一のさるは、一 本の　つなを　持って、その　りょうはしを　むすん で　います。

一の さる「さあ、できた。」
二の さる「それが　でんしゃ。」

一の さる「そうさ。」

三の さる「なんだ、つまらない。」

一の さる「おもしろいよ、これだって。いいかい。　この　前が　ぼく、うしろが　きみ。（と、わになった　つなの　中に　はいって、三のさるも　中に　いれます。）ぼくが　うんてんしゅ、きみが　しゃしょう。」

三の さる「しゃしょうって、どうすればいい。」

一の さる「ぼくと　きみの　あいだに　おきゃくを　のせる。ぼくが　ひっぱって　いくから、きみが　おきゃくの　せわを　する。とまったら、えきの　名を　いって、おきゃくを　おろしたり　するのさ。」

ちょっと　やって　みよう。いいかい。

『もみじが丘、もみじが丘、もみじが丘。おおりの
かたは　いそいで　おおり　ください。おのりの
かたは　おおりの　かたが　すんでから　おのり
ください。はっしゃします。』『ピイピイ。』これ　ふえ
の　音だ。そしたら　ぼくが、『ポー』と、でんしゃ
を　うごかすのさ。」

三の
さる「よし、しゃしょうに　なるよ。（一のさるの　まね
を　して）『おおりの　かたは　いそいで　おおり
ください。おのりの　かたは　おおりの　かたが』

一の
さる「だけど、ほんとの　しゃしょうは　そう　いって
いるよ。」

三の
さる「そうかなあ。おおりの　かたは、おのりの　かたの
……。」

二の
さる「それでは、ぼくらは　おきゃくに　なるの。」

一の
さる「そうじゃ　ない。きみは　そこで　きっぷを　うっ
て、（四のさるに）きみは　その　きっぷに　はさ
みを　いれるのさ。」

四の
さる「それなら　できる。いつか　村の　えきで、見た
いいにくいね。あんまり　おが　つきすぎて。」

ことが　あるよ。」

二の　さる「おもしろそうだ。すぐ　はじめよう。」

一の　さる「うん。」

――四ひきの　さるが、かたを　くんで、「でんしゃごっこ　する　もの　よっといで。」と　いいながら、ぶたいを　ぐるぐる　まわります。すると、ほうぼうから、さるが　あつまって　きます。

一の　さる（こだかい　ところに　あがって）「しょくん。いまから　この　さる山に、でんしゃを　走らせます。おのりの　かたは　きっぷを　かって、一列に　ならんで　ください。」

二の　さる「きっぷは　ぼくが　うります。いきさきを　はっきり　いって　ください。おつりの　いらないように　して　ください。おきゃくさんが　多いようですから、一ぴき、一まいに　おねがいします。」

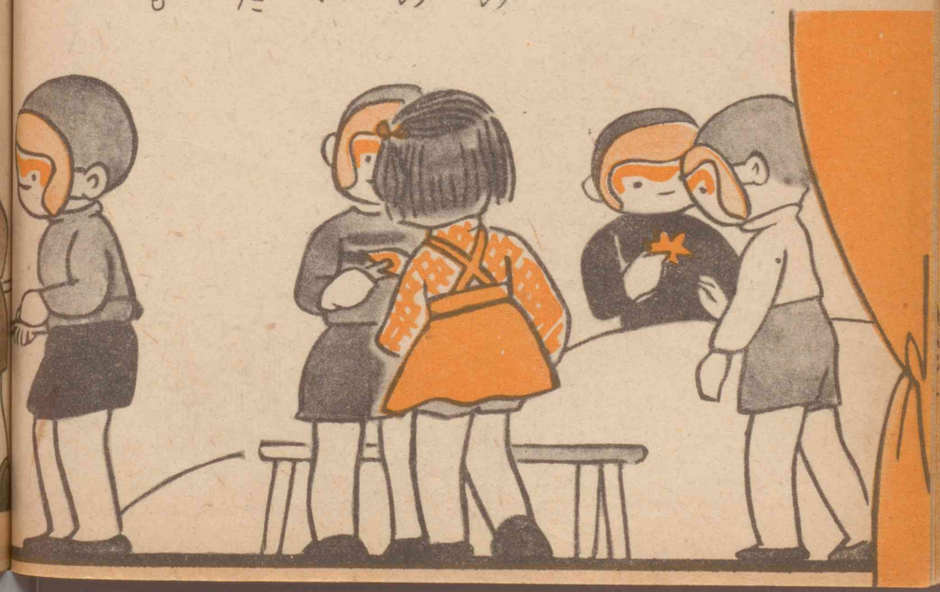
五の　さる「どんぐり山えきを　ください。」

二の　さる（木のはを　わたします。）「はい、どんぐり山。」

六の　さる「しいの木山。」

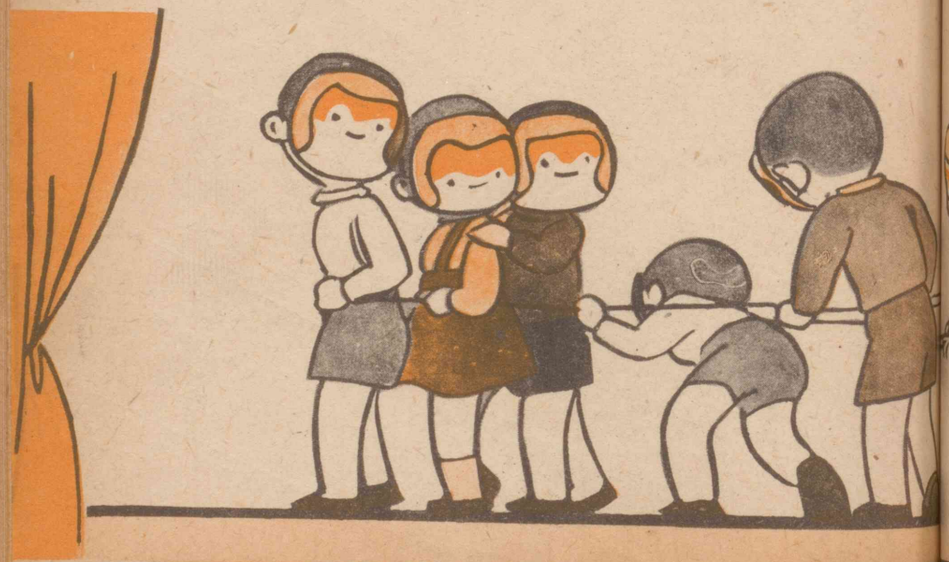
七の「さるがたに。」
さる
八の「まつたけ山。」
さる
九の「すすきがはら。」
さる

――十・十一・十二・十三の
さるも いろいろな ところの
名を いって、きっぷを かい
ます。きっぷを 手に 持った
さるは、はさみを いれても
らって、でんしゃの 前にな



らびます。

一の「さあ、おのり くださいさる
三の「おおりの かたが すんでかさる
ら おのり くださいさる
一の「きみきみ、いまから 出かけさる
るのだから、おりる おきゃ
くは ないよ」さる
三の「あ、そうか。では おおりの
かたが ありませんから、お



のりの　かたは　どんどん　おのり　ください。」

一の さる「ごじゅんに　おつめ　ください。入口に　立たない　ように　して　ください。つぎは、月見が丘に　と　まります。」

三の さる「つぎは　月見が丘で　ございます。」

十二の さる「もっと　つめて　ください。」

十三の さる「中は　すいて　いるだろう。」

九の さる「もう　いっぱいよ。くるしいわ。」

一の さる「みなさん、まんいんですから　むりを　しないで　ください。おのりに　なれない　かたは、つぎの

でんしゃを　まって　ください。」

三の さる「では、はっしゃします。」

一の さる「まどから、かおを　出さないで　ください。」

三の さる「はっしゃ、ピイピイ。」

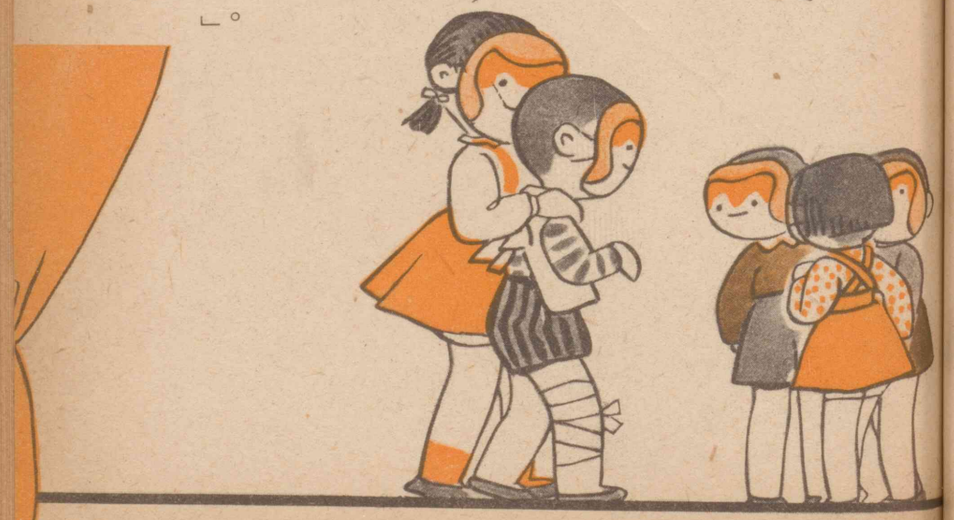
一の さる「ポー。ゴトン、ゴトン。」

——さるの　でんしゃは　十一、十二、十三のさるを　のこすと、ぶたいを　ひとまわり　して　いって　しまいます。

十一の
さる「つまらないよ、のれない　なんて。」
十二の
さる「ほかへ　あそびに　いきましょうよ。」
四の
さる「しばらく　おまち　ください。すぐ　かえって　きますから。」
十三の
さる「しばらくって　どのくらい。」
四の
さる「それは　その、はじめての　ことですから、じかんは　よく　わかりません。」

――そこへ　十四のさるが、足に　ほうたいを　した、おとうとの　さるを　つれて　きます。

十二の
さる（これを　見て）「あら、もう　そとに　出ても　いいの。」
十四の
さる「ええ、さんぽぐらいなら、いいんですって。」
十三の
さる「よかったね。まだ、いたむだろう。」
十四の
さる「うん、ときどきね。」
十五の
さる（おとうと）「なに　して　いるの。」
十二の
さる「でんしゃごっこよ。でんしゃが



いま　出たばかりで　まってるの。」

十五の「ねえさん、ぼくらも　しない。」

十四の「だめよ。足が　わるいのに。」

十五の「すこしくらい　あそんだって　いいだろう。」

十四の「でも　でんしゃごっこ　なんて　むりよ。」

四の「それじゃ　きみ、きっぷきり　しないか。」

十五の「のった　ほうが　いいよ。」

十二の「だったら　わたしたちだけで、ほかの　こと　しましょうよ。」

十五の「だって、ぼく　でんしゃごっこが　したいよ。」

二の「きたよ、きたよ。きっぷの　ない　かたは、早く　かって　ください。でんしゃが　きました。」（でんしゃが　くるのを　見つけて）

——でんしゃが　きます。ぶたいを　ひとまわり　して　とまります。

三の「もみじが丘、もみじが丘。おおりの　かたは　いそいで　ください。おのりの　かたは　おおりの　かたが　すんでからに　して　ください。（ほうたい

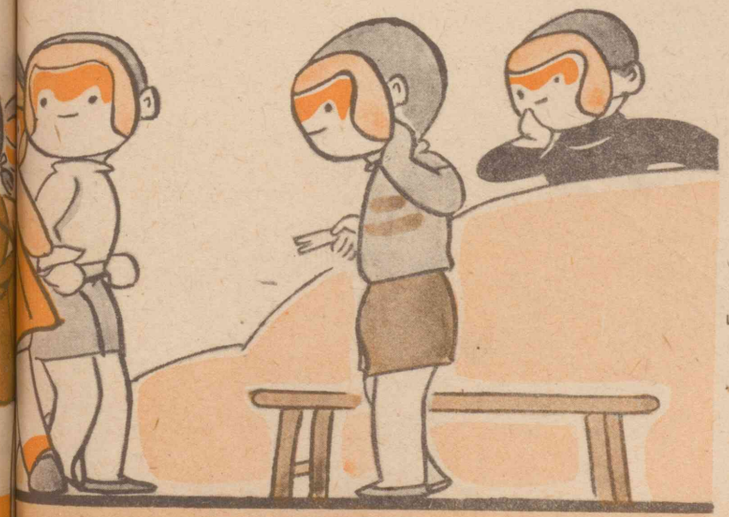
を　した　さるを　見て）　おやおや、けがを　した　かたが　いますね。のるんだろう　きみ。」

十五の　さる「うん、のせて。」

三の　さる「これは　こまった。うんてん　しゅさん。どうしたら　いい　だろう。」

一の　さる「さあ、足が　わるくてはね。この　きゅうこうでんしゃには　むりだよ。」

十四の　さる「そうでしょう。（おとうとに）

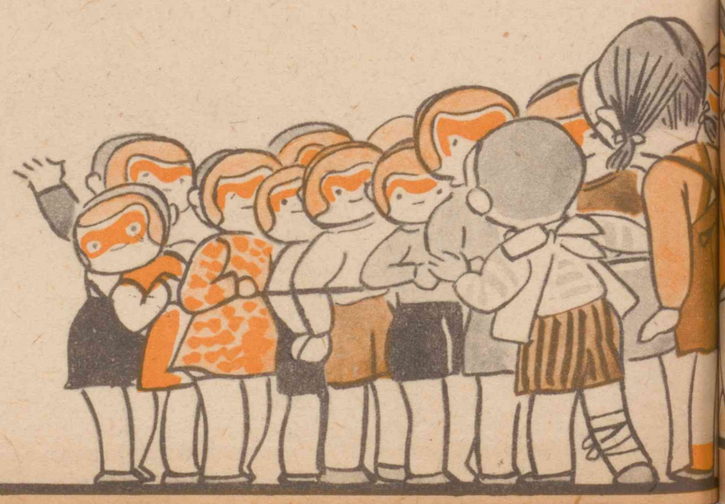


ね。よしましょう。でんしゃ　ごっこ　なんて。」

三の　さる「みんな　のりましたか。はっ　しゃですよ。ピイピイ。」

一の　さる「ちょっと　おまち。なんとか　して、足の　わるい　おきゃ　くさんを　のせられないかな　あ。」

七の　さる「そうだとも、のせて　あげよ　うよ。」



十二の「かわいそうよ。なかまに　入れない　なんて。」
さる
一の「あ、いい　ことが　ある。しゃしょうさん、ちょっ
さる
と……」（と、三のさるの　耳に　口を　あてて
なにか　いいます。）
三の「うん、うん、そうか。それは　いい。（みんなに）
さる
おのりの　みなさま、この　でんしゃは　もみじが
丘どまりに　なりました。おきのどくですが　みん
な　おりて　ください。」
十一の「なあんだ、せっかく　のったのに。」
さる
九の「でんしゃごっこは　よすの。」
さる

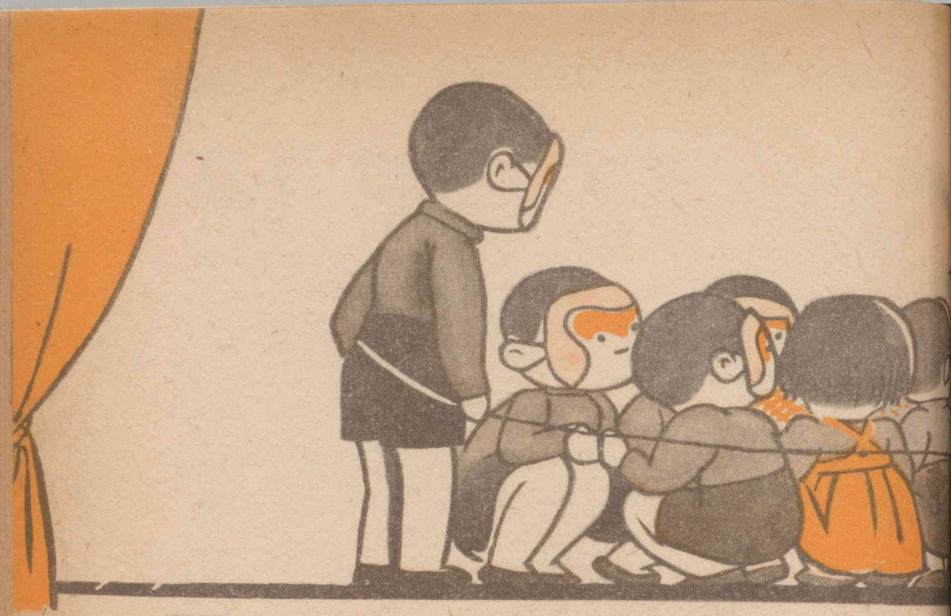
——みんな　なわの　でんしゃの　そとに　出ます。

一の「みなさん。こんどは　びょういん列車で　ございます。」
さる
十の「そうか、きしゃごっこ　するんだね。」
さる
一の「びょういん列車は、からだが　わるくて、ふつうの
さる
汽車に　のれない　人を　のせます。いま　もみじ
が丘えきに、足の　わるい　人が　きました。から
だの　わるく　ない　人は　汽車に　なって　くだ
さい。」
八の「さんせい。」
さる

九の さる「さんせい。」

――みんな　手を　たたきます。

一の さる「では　二列に　ならんで　ください。それから　むき　あって、前に　いる　人　と　手を　つないで　ください。いいですか。はい、



みんな　しゃがんで　ください。（足の　わるい　さるに）きみ、これに　のるんだ。」

十五の さる「だって、いいよ。ぼく、きっぷきりに　なるから、前のように　でんしゃごっこして。」

五の さる「いいさ。うんてんしゅさんの　いう　とおりに　しよ

う。早く のれよ。きみ。」

十の さる「びょういん列車だから、きみだけ のるんだよ。」

十五の さる「ねえさん、どうしよう。」

十四の さる「ちょっとだけ のせて もらったら。」

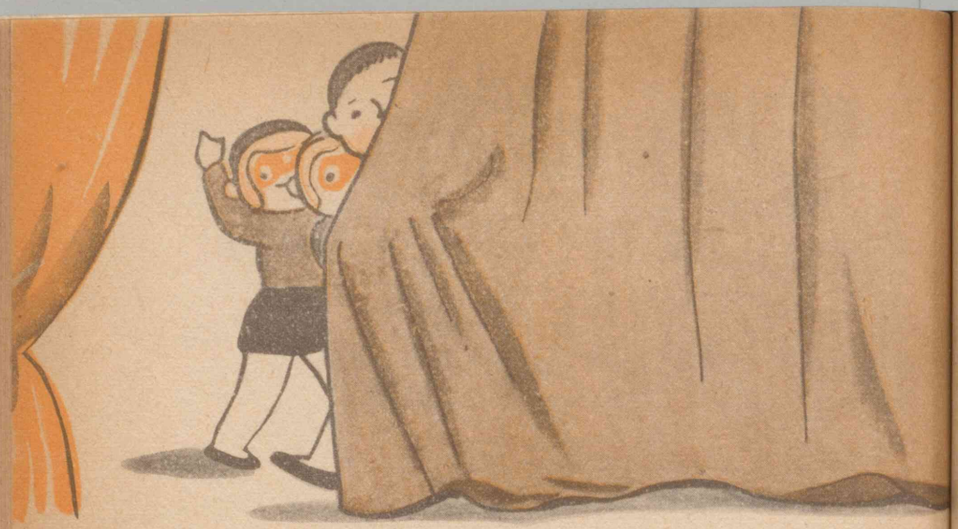
十五の さる「うん、ちょっとだけね。」（と、みんなが 手を にぎりあって いる 上に のります。）

三の さる「さあ、からだを よこに して。」

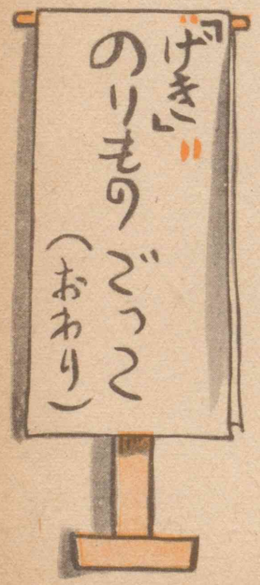
一の さる「びょういん列車だから ゆっくり いくよ。」

三の さる「はっしゃ。リリリン。」

一の さる「ポー。シュッ、シュッ。」



——みんな、「シュッ、シュッ。」と声を あわせて、ぶたいを まわります。声が だんだん 早くなって まくが しまります。



七　二宮金次郎

ふりつづく　雨は、三日　たっても、四日　たっても
いっこう　やみそうに　ありません。だんだん　ふえて
くる　さかわ川の　にごり水は、村人の　心を　くらく
して　いきました。つつみが　きれたら　たいへんですから
村の　人々は、夜も　ねないで、この　つつみを　まもり
つづけました。
しかし、川に　あふれて　きた　水は、とうとう　つつ

みを　きって　しまいました。とり
入れも　まぢかい　たんぼは、いち
めんの　どろ海に　なって　しまい
ました。中には、その　水が　家の
中まで　はいって　きた　ところも
あります。

二

やっと　雨が　はれて、みんな
ほっと　しました。
しかし、つつみを　やぶった　水

が、たくさんの　石ころや　川ずなを　ながしこんだので、田も　はたけも　道も、めちゃめちゃに　なって　しまいました。

これを　見た　村の　人は、だれもが　ふかい　ためいきを　もらしました。

そうして、どんな　ながあめにも、どんな　出水にも、しんぱいの　ない　つつみを、造らなければ　ならないと　かんがえました。

村の　そうだんが　まとまりました。

さっそく、村じゅうの　どの　家からも、一人ずつの

人が　出て、この　こうじに　とりかかる　ことに　なりました。

金次郎の　うちでは、おとうさんが　びょう気で　ねていました。そこで、少年の　金次郎が　出る　ことに　なりました。

三

あんなに　らんぼうを　した　さかわ川も、いまは　青く　すんで、おとなしく　ながれて　います。

金次郎は、だれよりも　早く　しごとばに　きて、どうぐを　そろえたり、じゃまに　なる　ものを　かたづけた

りして　います。

この　二三日、朝ばんは、めっきり　さむく　なって　きました。

ふじ山には、雪が　きて　います。

「おじさん、おはよう。」

「おう、金次郎さん、おはよう。早いね。」

「金次郎さん、よく　せいが　出るな。かんしんだ。」

「かんしんだなあ。」

元気な　金次郎は、村人に　まじって、いっしょうけんめいに　はたらきました。石や、土を　はこぶ　こと。くいを　うちこむ　こと。金次郎は　おとなに　まけないほど　よく　はたらきました。

おひるに　なると、みんな　草の　上に　こしを　おろして、べんとうを　たべました。べんとうを　すますと、たばこを　ふかしたり、話を　したり、中には　ひるねをして　いる　人も　あります。

「金次郎さん。べんとうの　すんだ　あとだから、まあ、ゆっくり　やすみな。そんなに　はたらいては、からだ

が　つづかないよ。
「金次郎さんは、もう　りっぱに
一人まえ　なんだから。」
と、みんなが　いいました。
金次郎は、
「ええ、でも。」
と、あせを　ふきながら　しごと
を　つづけました。
つよい　しっかりした　つつみ
は、だんだん　長く　できあがっ

て　いきました。

四

「おじさん、これを　はいて　みて　くださいませんか。」
「ほう、これ　金次郎さんが　作ったのかい。」
「ええ、まだ　まずいですけど。」
「いや、これは　とても　はきごこちが　いいぞ。」
「こりゃ　ありがたい。」
「よく　こんな　ことに　気が　ついたなあ。」
ひるま　はたらいた　金次郎は、夜は　夜で、この　わ
らじつくりを、もう　いくばんも　つづけて　きました。

やがて、つつみが　りっぱに　なおりました。みんなは心から　これを　よろこびました。金次郎は　子どもながら、自分も、この　しごとの　おやくに　たった　ことを　よろこびました。

八　しばふの　上

私は、あたたかな　きいろい　しばふの　上に　ねころんで　いる。

目を　とじたり、ひらいたり　して　いる。

目を　とじると、私の　耳に　はいって　くるのは　なんだろう。

風に　おわれて　おちる　このは。
とびまわる　ぶよ。
それから　はるかに　とおい　町の　音。

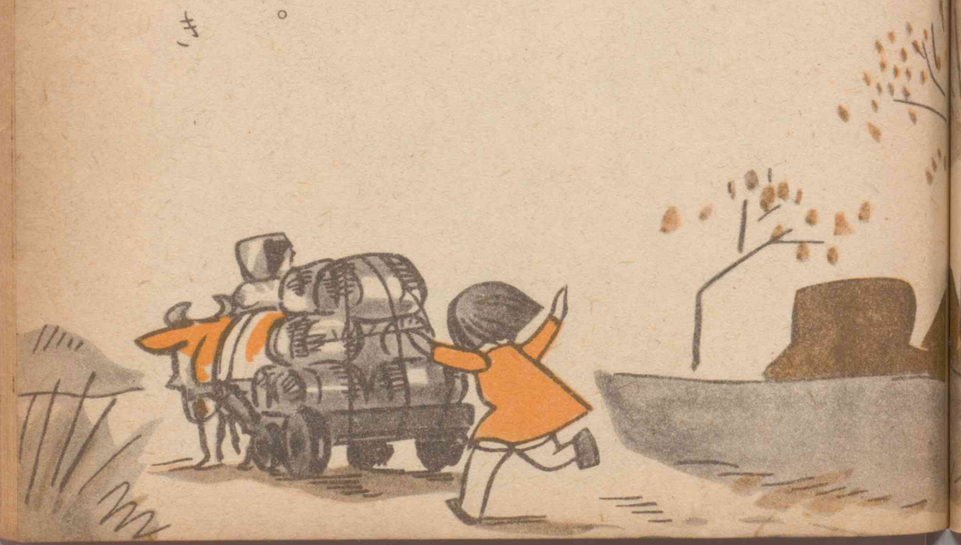
目を　ひらくと、空が　青い。
空が　どこまでも　青い。

大きな　木が　てっぺんから、
さかんに　かれはを　ふらして　いる。

九　おちば

村の　空が
きゅうに　あかるく
なりました。

とし子さんも　まさ子さんも
空を　あおぎました。
「かきの　木の　はっぱが、
おちて　しまったのね。」
「あら、また、からすが　かきを
たべに　きたわ。」
二人が　しっしっと　いって、
からすを　おいはらおうと　しました。
でも、高い　空へ、声は　よく　とどき
ませんでした。



すいしゃばへ、お米を　はこんで　いくのでしょう。牛が　車を　ひっぱって　いきました。かきの　おちばをふんで　いきました。足に　力が　はいるたびに、すこしずつ　すべって　いきました。

とし子さんが、牛の　車の　あとから　ついて　いきました。そうして、すてんと　ころびました。とし子さんは、わらで　あんだ　ぞうりを　はいて　いました。おちばの上って　すべるんですね。

とし子さんと　まさ子さんは、村の　友だちを　よんで

きました。みんな　手に　ほうきを　持って　きました。道によこに　ならんで、おちばをはきあつめました。おちばの山が、いくつも　できました。

くみあいの　おじさんが　とおられました。

「みんなで　一つの　山に　あつめて　ごらん。いい　たいひが　できるよ。」

ほうきを、ざると　とりかえて　きました。ざるに　入れて　おちばを　はこびました。

大きな　大きな　おちばの　山が　できました。ちゃめさんの　よしおくんが、おちばの　上で　とんぼがえりを　しました。よしおくんの　からだは、おちばの　上で　ゴムまりのように　はずみました。

「この　おちば、なんぜんまい　あ

るかしら。」

「かぞえるのに　たいへんだよ。」

「きつねが　おかねに　するって　ほんとうかしら。」

「もし、おさつだったら　なんまんえん、なんびゃくまんえんかしら。」

「はっぱって、木の　きものなの。だったら、もう　すぐ　冬が　くるのに　さむいでしょうね。」

「木たちね。はっぱで　いきを　して　いたんだよ。冬が
くるので、もう　ねむるのさ。かえるや　へびが　ねむ
るみたいにね。」
いろいろな　ことを　話しながら、みんな　赤いき
れいなのを、なんまいずつか、ポケットや　たもとに　入
れて　かえりました。
まさ子さんは、せ中
の　あかちゃんにも、
一まい　ひろって　や
りました。あかちゃん

のは、だれのよりも　きれいでした。
えのぐで　そめたようでした。
あかちゃんは、はっぱを　見て、あっぷ　あっぷと　い
いました。

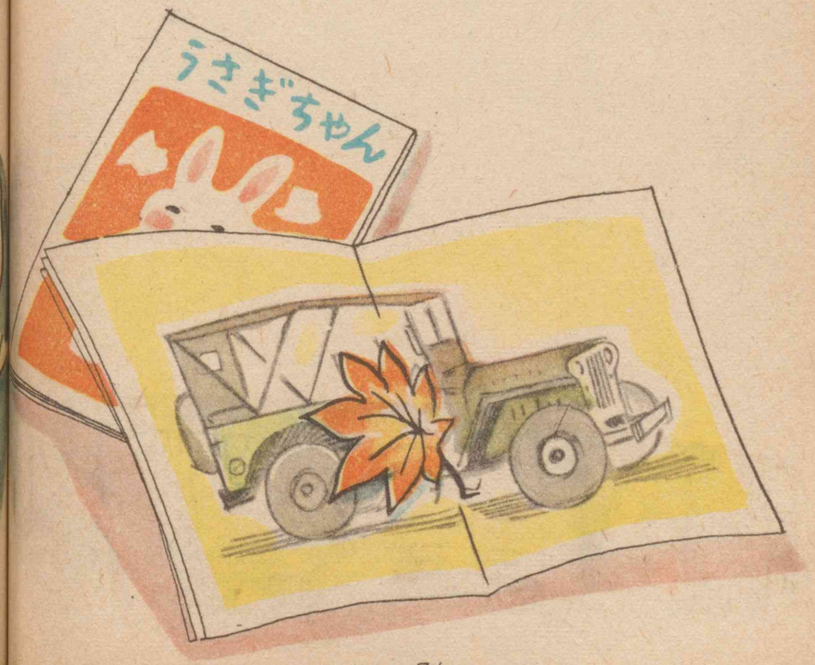
学校の　うんどうばの　すみに、たいひの　山が　でき
ました。よし子さんたち、みんなで　かきあつめた　おち
ばが、そこへ　はこばれたのです。うまやの　中で、馬が
ふんだ　わらや　ふんと　いっしょに、だんだん　つみか
さねられたのです。

たいひつくりは、六年生の　にいさんたちでした。
おちばたちは、そこで　むれて　くさって、こやしに
なるのです。
はたけの　麦や　やさいたちには、おいしい　ごちそう、
はっぱの　たいひ。

とし子さん、まさ子さんたちに、ひろって　もらった
あの　おちばたちは、どう　したでしょう。
ままごとの　おさらに　なったかしら。おにんぎょうの
ざぶとんに　なったかしら。でも、ままごとが　すむと、

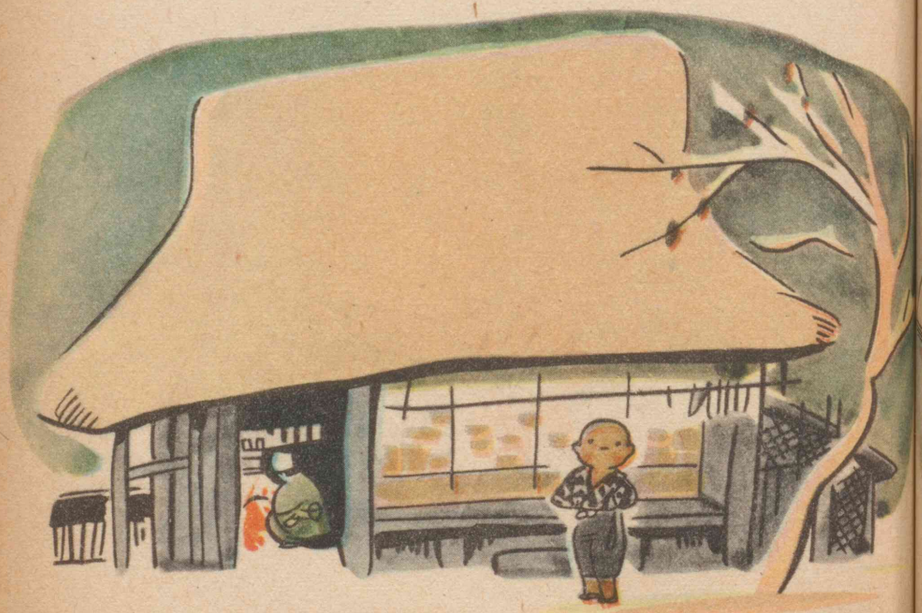
としちゃんたちは、たいてい　はっぱを　わすれて　しま
います。はっぱは、おえんの　下に　すてられたかしら。
それとも　また、はきよせられて　おにわの　すみで、ほ
かの　はっぱや　なんかと　いっしょに、たき火に　され
たかしら。そうして、はいに　なったかしら。はいも　は
たけの　こやしに　なります。
えのぐで　そめたように　赤い　きれいな　あの　はっ
ぱ。まさ子さんに　おんぶされた　あかちゃんの　はっぱ。
あの　はっぱは　どうして　いるかって、
あの　はっぱはね。

あれは　ジープの　ついた
本の　中で　ちょうちょうの
ように　ねむって　います。



十　冬が　くる

しも
にわに　たまった
おちばの　上に、
けさは　しもが　白い。
もう　じき　冬。
おかあさんが　たく
かまどの　火が　赤い。



手ぶくろ

ねえさんが　つくって　くれた
あたたかい　ぼくの　手ぶくろ、
やわらかい　毛糸の　手ぶくろ。
やさしいよ、ぼくの　ねえさん。

十一　かんばん

一

この　あいだ、学校から　かえりに、みんなで、おみせやさんの　かんばんを　よんで　あるきました。かんばんには、むずかしい　字が　多いので、かなの　かんばんをさがす　ことに　しました。

いちばん　はじめに、とし子さんが　みつけました。

ラジオ・デンキ

ラジオやさんの　かんばんです。つぎは　はるおさんが

みつけました。

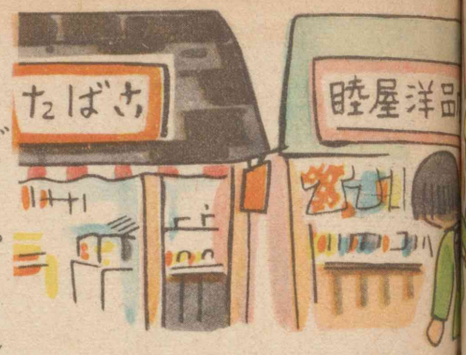
きむらの　たね

たねを　うって　いる　木村やさんです。また、とし子さんが　みつけました。

パン　だるまや

私には　まだ　みつかりません。

私は、早く　マーケットの　ところに　くれば　いいと　思って、いそいで　あるきました。マーケット



には、大きく「マーケット」と　書いて　あるからです。

その　うちに、また　とし子さんが　みつけました。

たばこ

たばこやさんですけれど、たばこの「こ」は　かん字の木と　いうような　むずかしい　へんな　字が　書いて　あって、よく　わかりません。その　時、むこうの　方から　じどうしゃが　きたので、「あぶないから　もう　やめましょう。」と　いって、やめる　ことに　しました。

かえってから、おかあさんに　お話　したら、
「そうね、くすりやさんなんかに、かたかなの　かんばん
が　出て　いないかしら。でも　あぶないから　気をつけ
なさいよ。」

二

きのう、おつかいの　かえりに、かんばんの　字を　書
いて　きました。
マーケット
はきもの
ブリキ

ふたばや
メンソレータム
これだけ　みつけました。たいてい、左から　書いて
あるのですが、「はきもの」　だけ　右から　書いて　あった
ので、はじめは「のもきは」と　よんで　しまいました。
にいさんに　お話　したら、
「やおやなら　いいよ。どっちから　よんでも　おなじだ
から。」
と　いいました。

十二　氷すべり

氷の　みずうみ
あかるいな。
お日さま　きらきら
まぶしいな。
みんな　いっしょに
すべりましょ。
おてて　つないで
するする　するり。

北風　ふいても
さむく　ない。
赤い　えりまき
赤い　かお、
みんな　元気で
すうる　すうる、
とおくの　方まで
するする　するり。

十三　もちつき

一

あすは　もちつきと　いうので、おかあさんは　朝から　その　用意を　しました。

せいろや　うすや　きねを、ものおきから　出して、きれいに　あらいました。

それが　すむと、もち米を　よく　といでから、水を　入れた　おけに　ひたして　おきました。

夕はんの　とき、

「あしたは　なんじごろから　つくの。」

と　おききすると、おとうさんは、

「もちつきは、朝　早く　やるのが　気持が　いいからね。うすぐらい　ころから　はじめる　ことに　しよう。あしたは　ねぼうは　できないよ。」

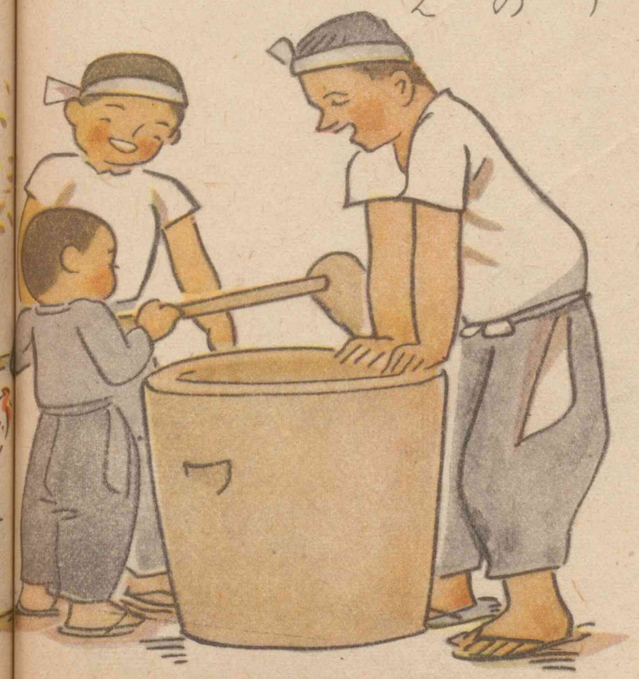
と　おっしゃいました。

ぼくは、もちつきに　おくれては　つまらないと　思っ

てタはんが　すむと　すぐ　ねました。

二

目が　さめました。おとうさんも、おかあさんも、おば
あさんも、にいさんも、もう
おきて　いて、だいどころの
方から、わらい声が　きこえ
て　きます。あ、しまった
と　思って、とびおきて
きて　見ると、まだ　もち
つきは　はじまって　いま



せん。しめた、ことしは　ま
に　あったぞと　思うと、う
れしく　なりました。
おばあさんは、かまどの
火を　どんどん　たいて
ます。かまの　上には、せい
ろが　かさねて　あって、
せいろの　上からは、白い
ゆげが、いきおい　よく
ふき出して　います。

「さあ、もう　よさそうですよ」。
と、おばあさんが　おっしゃると、おかあさんが　いちばん　下の　せいろを　とって、うすの　中へ　もち米を　うつしました。
ふかした　もち米からは　ぱあっと　ゆげが　立ちのぼりました。
おとうさんと　にいさんは、まって　いたように　きねで　こねはじめました。
「よく　こねないと、おもちに　あばたが　できるからね。おもちは　つく　ことよりも　こねる　ことが　だいじ

だよ」。
と　おっしゃって、おとうさんは　うすの　まわりを　ぐるぐる　まわりながら　こねます。
もち米は　だんだん　ねばって　きて、おもちに　なって　きねの　あたまに　くっついて　きます。おかあさんは、きねの　さきに　くっついた　おもちを　しごきおとしたり、うすの　中の　おもちを　かえしたりします。
おとうさんは、
「もう　いいだろう。つくよ」。
と　おっしゃると、力　いっぱい　つきはじめました。

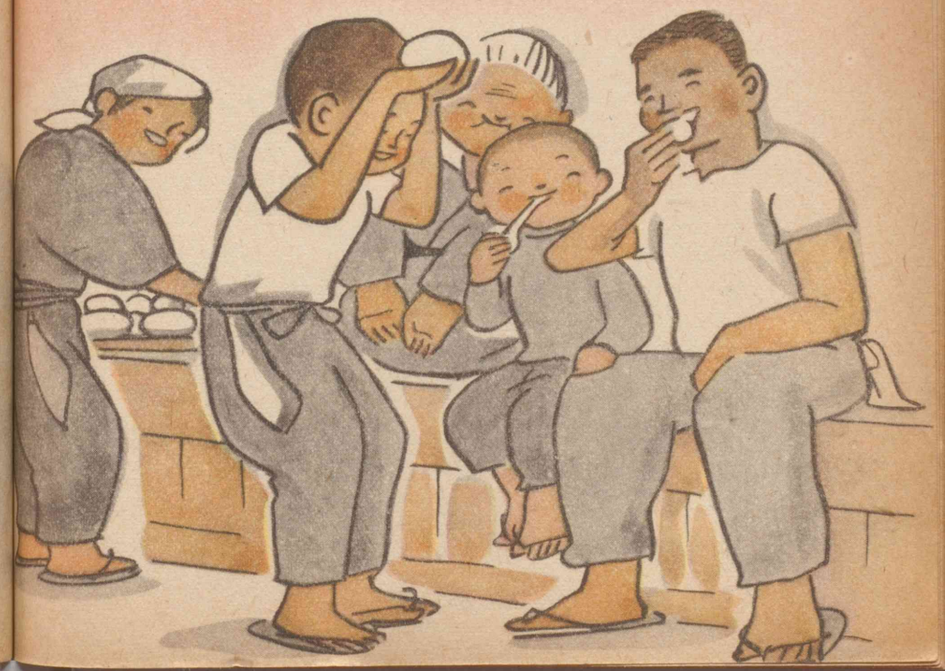
「そら。」「ほい。」「そら。」
「ほい。」と、おとうさん
と　にいさんが、かけ
声　いさましく　つく
のを、おかあさんは
それに　あわせて、「は
い。」と　いって、うす
の　中の　おもちを
かえします。
「そら。」「ほい。」「はい。」

「そら。」「ほい。」「はい。」
と、とても　いせい
よく　つきました。
やっと　ひとうす
つけました。
「いちばん　はじめの
は　おそなえもちに
しよう。」
と　おっしゃって、大
きなのや　中くらいの

や　小さいのを　たくさん　お作りに　なりました。
まもなく　ふたうすめを　つきはじめました。前と
おなじように　して　つきはじめました。ぼくも　ついて
みたく　なって、にいさんに　かわりました。おとうさん
の「そら。」と　いう　声を　うけて「ほい。」と　つこうと
しますが　きねが　ねばって　うごきません。
「やっぱり　むりだなあ。」
と　いわれて、くやしかったが、にいさんに　また　かわ
って　もらいました。
おもちは、だんだん　たくさん　つけました。

いちばん　おしまいを　ついた　時、
「これで、きょうの　もちつきいわいに　たべる　おもち
を　作りましょう。」
と、おばあさんが　おっしゃいました。
「にんげんさまの　おそなえだ。」
と、ぼくが　いったら、おばあさんは、
「そう　そう。にんげんさまの　おそなえは　あんこを
入れたのに　しますよ。」
と　おっしゃって、あん入りの　大ふくもちを　作って
くださいました。

にいさんは　ふざけて、
「これは　これは、もったい
ないやら、うまいやら、お
さきに　ちょうだい　いた
します。」
と　いって　たべました。
ぼくも　いただきました。
みんなも　大ふくもちのよ
うに　にこにこがおに　なっ
て　いただきました。



すこし　やすんでから、おとなりの　はじめさんの　おう
ちと、ふみ子さんの　おうちへ、おもちを　くばりました。
夕方、はじめさんの　うちから、豆の　はいった　おも
ちを　いただきました。ふみ子さんの　うちからも、あわ
もちを　いただきました。
おもちが　たくさん　できたので、ぼくは　もう　お正
月に　なったように　うれしく　なりました。

字	土	宮	車	作	会
(77)	(57)	(52)	(20)	(10)	(4)
左	町	次	犬	野	前
(81)	(62)	(52)	(22)	(10)	(4)
右	牛	郎	方	鳥	入
(81)	(66)	(52)	(22)	(10)	(5)
氷	冬	石	列	南	口
(82)	(69)	(54)	(24)	(10)	(5)
北	毛	造	名	文	金
(83)	(76)	(54)	(31)	(10)	(5)
豆	馬	少	丘	長	走
(95)	(71)	(55)	(32)	(11)	(7)
正	糸	雪	見	汽	立
(95)	(76)	(56)	(33)	(20)	(10)

Copyright 1948, by
The Kyōiku Tosho Kenkyukai

All rights reserved
The text of this publication or any part thereof may not be reproduced in any manner whatsoever without permission in writing from the authors.

小国205

二年生のこくご 中

Approved by Ministry of Education
(Date Sep. 10, 1948)

感謝

左の作品を本書に掲載させていただきましたことについて、著作者諸先生に心から感謝をいたします。

おるすです……野口雨情氏
ふみきり……平塚武二氏
お月さま……菱山修三氏
しばふの上……菱山修三氏
はとばのねずみ…與田準一氏
おちばたちはどう
したかしら……與田準一氏

編者

東京都文京区大塚窪町
東京高等師範学校附属小学校内
財団法人 教育図書研究会
理事長 東京高等師範学校教授 佐藤保太郎
担当執筆者 東京高等師範学校教諭 田中豊太郎
〃 花田哲幸
〃 青木幹勇
〃 森下巌
〃 小島忠治

表紙とさしえ 田原輝夫 林義雄

印刷 昭和二十三年九月十日
発行 昭和二十三年九月十四日
定価 円

著作者 財団法人 教育図書研究会
会長務台理作

発行者 学校図書株式会社
代表者 川口芳太郎
東京都港区芝三田豊岡町八番地

印刷者 図書印刷株式会社
代表者 川口芳太郎
東京都港区芝三田豊岡町八番地

発行所 学校図書株式会社
東京都港区芝三田豊岡町八番地

本書の指導書・ワークブック・註釋書並びにこれに類する一切のものの無斷發行を禁ずる。

庫
18
588
広島大学図書
01 0130449588